ある昏さについて

Author:80

Ⅰ．ある昏さについて

私たちが自然現象を記述する時、特に科学の言葉によって記述する時、そこには観察する者としての私たちと、観察されるものとしての自然現象がある。そこでは動的な自然現象に対して、観測者は不変であり静的であり、また同様に、記述言語も不変であり静的である、と捉えられる事が多い様に見受けられる。

またその様な方法で記された記述言語の束は、科学的認識における記述系構築の方法論として取り扱われ、それによって記述された諸々の語りは、自然現象への科学的認識/理解として取り扱われたりもする。

しかし実際に自然のうちに身を置けば、私たちはけして不変かつ静的な語り手などではない。またそれ故に、私たちの記述言語も不変かつ静的なものなどではない。なぜならば、私たちが世界を認識する方式の根底を、私たちが不変的かつ静的に知る事が、おそらくは不可能だからだ。

もし形式科学における公理系のように、私たちの認識の根底に、私たちにとって明確な公理群があり、そこから何らかの論理系が展開していく、という様な姿で私たちの認識が形成されているのならば、私たちが世界を認識する方式の根底は私たちにとって明らかだろう。またそこから、私たちの認識を基底とした私たちの語りも、明確で、そして公理的なものの不変性ゆえに、不変的で静的なものになるのかもしれない。

しかし私たちはおそらく、私たちの根底を明確に認識あるいは観測出来ない。なぜならば――私の思うところでは――その根底は私たちの認識よりも深い領域にあるとからだ。つまり、もしも私たち自身や、また私たちの認識が、何らかの状態を準備段階とし、その段階を起点に生じてきたのならば、その準備段階に還り至ったときには、観測者としての私たちの認識は――そこが私たちの認識の生じる起点以前の状態であるが故に――生じる以前の姿に解体されている様に思えるからだ。

すなわちこの話は、そこに認識が辿り着いたときには、認識は解体してしまってその活動は成立せず、また同様に認識を基とする観測も成立しない、その様な領域が、私たち自身の/私たちの認識自身の基底にあると思えるという話だ。そういった領域を想像した場合、そこは私たち自身にとって、あるいは私たちの認識にとって、明確に辿り着く事が能わない昏さを帯びた領域となる。

しかしながらまた、もしその状態から私たち自身や私たちの認識が生起してきたのならば、そここそが私たちの認識にとっては根底であり、根源/源流ともいえる領域となる。それならば避けがたく、私たちの認識も、私たちの認識を基とした私たちの語りも、その根源/源流へと、自分自身では明確に辿り着く事が能わない様相のものであり、それゆえに基底に昏さを帯びている、という事になる。

そうであるならば、私たちの語りはけして不変的であったり静的だとは言い難いように思う。というよりも、私たちの語りが実は静的なのか動的なのかというのは、私たち自身の認識の昏さのうちへの問いかけになってしまうため、私たち自身には知る事が出来ない事となるように思う。

こうした事をある言い方で語るなら、私たちの認識の根源/源流には、私たちの認識にとっての死が広がっている、とも言えるのだ。ここでいう死はしかし、生への対比的な状態というよりも、生/認識が解体した様相といえるのだろう※1。そしてまた、私たちの語りが実は昏く動的なものであるなら――私はおそらくそうだろうと思うものであるが――世界には、自然現象を不変的かつ静的に記述できる方式などはどこにもなく、私たちの語りは、その根を語りそのものの昏さ、すなわち話者自身の認識の根の昏さに対して下ろしている、確固とし難い語りなのではないかと思う。

※1：ところでまた、私たちの認識が、私たちの認識自身の預かり知らぬ領域から生起したかもしれない様に、私たちの生が、私たちの生自身の預かり知らぬ領域から生起したのなら、その領域――おそらくはまだ生が姿かたちを成しておらず、その意味で解体されている領域――は、死の領域であると同時に生の根となる領域なのかもしれない。その意味で、ここでいうところの生は死との対比的な状態などではなく、1 つの生きるシステムの動的なプロセスの一面同士であるように思える。

Ⅱ．メッセージについて

Ⅰの語りを是とするのならば、私たちは、ある昏さを基底に抱えた認識者だ、という事になる。あるいはさらに言えば、私たちは、自らが昏さのうちに還っていく事に対して、死や滅びと常に繋がっている者だと言える。そういった、自らの明確さを明証/確証出来もせず、また不死不変ではなく死や滅びに対して開かれた認識者にとって意味/意義を成すコミュニケーションやメッセージとはどのようなものだろうか。

少なくともそれは、いわゆる通信規約のようなものによって規定された、明確なメッセージの取り交わしのようなものではないように思える。なぜなら世界/事物が示す意味や意義の不明瞭さこそが、昏さを基底に抱えた認識にとっての世界の基本的な姿だからだ。

いってみれば「明確な意味」というのは、明確な語りの系における事物の位置や様相だ。しかし認識の基底に昏さを抱えたものにとっては、この明確さは常に仮のものでしかない。つまりその語りの世界に引きとどめられているという何らかの実感がある程度にしか、その語りの世界の意味の明確さは強度を持たないし、またその強度が幾ら増したとしても、私たちの認識が抱えるであろう本質的な昏さを覆せる訳ではないだろうからだ。

そういった認識者にとっては本質的に、事物はすべて働きかけのベクトルを持つ象徴群として機能するものと思われる。働きかけのベクトルとは、例えば生の安全性/危険性、アクセスの可能性/不可能性、願望の実現性/不可能性、等々といったものの象徴だ。例えば米や魚があれば飯が食えて生がつなげる、道に奥行きがあれば移動やアクセスが可能となる、ある高台にいけば気分を晴らしたいという願望が実現する、等々。これはアフォーダンス※2と言われるものとも近しいのかもしれないが、しかしさらに奥行きのあるものの様に思える。なぜならそこには、（文化的なものを含めた）記憶や学習や連想といったもの、あるいは私たちの諸々の願望や失望が、複雑に多層的に織り重ねられ得るからだ。

私たちは、自らの根に昏さを帯びながら、こういった事物が示す諸々のベクトル群のなか、すなわちメッセージ群のなかを生きているといっても良いと思う。その中で私たちは日々、無数の事物を配置しなおしたり壊したり組んだりしながら、私たち自身を取り囲む象徴群が示す働きかけのベクトル群を、私たち自身にとって望ましい姿かたちにしようと試み、時に成功したり時に失敗したりしているように思える。例えば身近なところでいえば、暮らしやすさや働きやすさや人間関係の構築等だ。

そしてこういった事から、私たちにとって意味/意義を成すメッセージとは、そのメッセージ単独で成り立つものではない様にも思える。なぜならそれは、私たちを取り囲む働きかけのベクトル群を何らかの形で編成し、私たちに何かの働きかけを強く/弱くしてくる事物全体（あるいは一部）の布置の動きを示すもの他ならないからだ。またそういったところから、その様なメッセージを生起出来るだけの状況の変化や不変性を引き起こすシーケンスの積み重ねこそが、私たちにとってのコミュニケーション（の枠組み）である、という言い方も出来る様に思う。

ところで私は、私たちの願望の多くは、アクセスに関するものだと思っている。もっと言えばアクセシビリティに関するものだと思う。それは生の安全性や危険性、存在の受容や否定、

関係性への溶け込みやそこからの離脱、また自ら自身の昏さや、世界や事物の不明瞭さ/明瞭さ、などといったものへのアクセシビリティだ。これらを満たすための無数の行動の積み重ねと、そして成功と失敗、受容と拒絶、願望と失望、そして始まりとしての生起と終局としての滅び――生起も滅びも私たち自身には、姿かたちを保っては辿り着けないものかもしれないが――が、私たちの存在を彩る無数の出来事であり、コミュニケーションの本質に関わる部分であるように思える。

※2：この語りで語っている昏さについてアフォーダンス風にいうなら「私たちのうちには、私たちの生や認識への、認識論的な『(確固とした）支持面』はない」という話でも構わないのかもしれない。

Ⅳ．生の場所について

「死んだらどこにいくんだろうね」という問いかけがある。私見では、その死が私たちの生にとっての死ならば私たちの生が解体したところへ、その死が私たちの認識にとっての死ならば私たちの認識が解体したところへ、私たちはいくように思う。

そしてまた、その解体的な状態を、私たちは経験も体験も出来ないのではないかと思われる。なぜなら私の生が解体し尽くされたとき、そこではその状態を経験/体験するための私の生の姿かたちは失われているからだ。同様に、私の認識が解体し尽くされたとき、そこではその状態を経験/体験するための私の認識の姿かたちは失われており、そのため、私は私が解体しつくされた状態を経験も体験も出来ないように思われるからだ。

ところで認識が解体されつくしたところというのは、認識にとっての死であるように思うが、同時に母体であるようにも思う。なぜなら、もし私たちの認識がいずこからか生起してきたのなら、私にはだが、そこには私たちの認識が生起するだけの状況が整っていたように思えるからだ。そしてもしその状況が「私たちの認識が生じる以前の、私たちの生の状態」であるならば、私たちの認識にとっての死の場所は、私たちの認識では辿り着きがたい、私たちの生の場所/領域だ、という事になるように思われる。

もちろん観測者としての私たちの認識が観測できる、私たちの生の姿もある。それは起きて歩いたり会話したり食事をしたりといった日々のあれこれだ。しかしより根源的なレベルへと還る話をするのであれば、私たちの認識にとっての死のレベルにある、私たちの生こそが、私たちの認識にとっては母体であり根であり基であり根拠である、という事になるように思われる。

ところで生にとっての死とは何だろうか。これはまた認識にとっての死とは幾分様相が違うように思う。なぜなら生の手前には、一面では、ある意味では何もないように思えるからだ。そこにはおそらく熱と滅びがあるだけであり、生はどうにかこうにか熱の方に留まっているに過ぎないであろうからだ。しかしまた一面では、私たちの生が、私たちの生自身の預かり知らぬ領域から生起したのなら、その領域――おそらくはまだ生が姿かたちを成しておらず、その意味で解体されている領域――は、死の領域であると同時に生の根となる領域である様に思う。あるいはもしかしたらこの二面のはざまのうちに、確固としない姿で、生の根はあるのかもしれない。

そしてまたところで、生と認識とのうち、今こうしてこの文章を読み書きをしている様な私たち自身にとってより始まりに近いのはどちらだろうか。これは難しい問題を孕むのだろうが、単純化して良いのなら、認識ではないかと私は思う。

なぜなら、私たちが第一義的に体験者/経験者であり、その意味で観測者なのだとしたら「観測者による/観測者からの生への観測」よりも「観測可能性/認識可能性の励起自体」が先んじると思えるからだ。その意味で私たちは認識であり生の観測者であり、生の観測者であるが故に自らの完全な生に辿り着く事はおそらく出来ないのかもしれない。なぜなら完全な生には生の体験そのものだけがあり、観測性は含まれないように思えるからだ。とは言っても、完全な生にも観測性は含まれるかもしれないし、あるいはまた、観測性がまったく解体された姿で、私たちは生を体験するのかもしれないが。

Ｖ．光景について

木が花を咲かせるとき、そこに居合わせられる者は幸福である。なぜならば、私たちの体験は、私たちの言語的世界ではなく、（私たちの言語的世界を含めた）私たちの生の世界で行われるからだ。そういった生の世界の出来事に居合わせられる者は幸福である様に私は思う。ありきたりかもしれないが、真に重要なのは説明ではなく体験だ、といってもいい（もちろん説明も「説明をする/される」という体験でもあるのだろうが)。

ところで私たちの言語的世界は、ある程度明確に思えるような単語や文法や文脈から成っているが、その実、その言語の話者が私たちであり、私たちの認識が、明確とは言い難い状態に根差していると思われる以上、私たちの言語的世界は一定程度にしか明確ではありえない様に思われる。あるいはこの「一定程度にしか明確ではない明確さ」に、すなわち「一定程度の昏さを受け入れた自らたちの在りよう」まっとうに立つ言語活動こそが、ある意味

では明晰な言語活動かもしれないとも私は思う。

さてところでまた光景とは、言語活動も、そうではない生の活動も、あるいは生にとっては昏いと思われる領域の活動への示唆も含んだ、無数の事物の奥行きから成るように思う。そこのうち、つまり光景のうちでは、私たちは本質的には一種の迷い人であり――なぜなら私たちが何者で、そこがどのような場所であるかを立証しきるすべはおそらくないのだから――そこで私たちが出来るのは、私たちの体験の方式/認識の方式に根差した格好での、そこで起きている出来事の受容のみか、少なくとも受容から始まる無数の出来事であるように思える。

そして光景がそのような昏さを含むものであるならば、そこでの出来事に語りを差し挟むのは、多くの場合はその体験を損なう事に繋がり得るように思う。なぜならば、もしその語りが過度な明証性に立とうとしながら行われたものである時、それは、それが過度である分だけ、光景本来の、あるいは光景と私たちとの関係性本来の、昏さを損なうからだ※4。

また、ここでいう昏さには 2 つの種類があるのかもしれない。1 つは私たちの認識自身の昏さ。そしてもう 1 つは、光景が持つ奥行きに対して、私たちの感覚器官が届き得る限界からもたらされる昏さだ。すなわち木立の向こう側へは視覚は届かず、壁に囲まれた先の先へは聴覚は届かないといった様な事だ。

ところでそうなると、そこには昏さの先への予感が生じる/含まれる様に思う。私たちが認識活動を、特に生への認識活動を、1 つの願望として遂行しようとした時に、昏さの先への認識を望む事になる様に思えるからだ。そこでは「昏さに至る手前にある道標/メッセージ群/ベクトル群（例えば光景の特徴）が、総体的にどういったベクトル/奥行きを向いているのか」が問われる事となる。そして私たちの認識は、そのベクトル/奥行きを、淡い/空想上の導線としながら、光景に臨み、そしてまた光景の先に臨もうとするものである様に思う。

その願望の理由は、私たちの認識が、私たちにとって重要な何かに触れたいという事かもしれない。それは生と認識が一体であった状況を、自らのうち/根だけではないところで実現しようという願望にも思えるが、しかしそれは、そこに「自分の生」ではない何か/昏さの先への予感が含まれるという意味で、自ら自身の生へと解体する事とはまた違う願望のように思える。それはいえばある生が、自らの熱ではない何か別のものの熱に触れ、その手応えを得ようとする事のように思える。その別のものとは、自らではない別の個々の生かもしれない。しかしまた私たちは、別の要請（例えば生活のための要請）の重みのうちにそういった願望をかき消しながら、生きていこうとしているようにも、私には思える。

※4：個人的に詩を過度に称賛する気はないが、私たちの根への理解や語りを含んだ語りは――それは本来的にはすべての語りがそうなのだろうが――、昏さを含むゆえに詩的にならざるを得ないように思う。だがここでいうところの詩は、いわゆる詩の体裁を取っていない、日常における語りであっても、それが昏さに立脚したところからの語りなら、それでおそらくは十分なのだ。そしてまた、もし何かを伝える語りがあるのならば、そこに必要なのは「分からなさに立脚していながらも伝えたい事があり、そしてそれを伝えようとしている」という事を伝えられるような語りの姿であるように思える。いってみればそれは「分かる」ための語りではなく「私たちの分からなさ/限界が、どのような分からなさ/限界なのか、も伝えられるような」語りなのだ。もし（語りなるものの）限界を越えて導通するもの/メッセージがあるとするならば、そういった姿の語りになるように私は思う。なぜならばその語りの身振りのうちには、昏さ/限界と、その越えがたい限界を越えて何がしかを伝えようとする姿勢との 2 つが示されているからだ。あるいはおそらく、話者が導通の明確さを求めれば求めるだけ、導通は遠ざかるだけなのだ。